

●講演

場所の力：芸術・場所・スケール

鈴木博之

キーワード

場所 (place)

スケール (scale)

ゲニウス・ロキ (genius loci)

劇場 (theater)

舞台芸術 (performing arts)

The Power of Place: Art, Place and Scale
(a Welcoming Lecture for New Students at Suntory Hall, Tokyo, April 3, 2008)
by HIROYUKI SUZUKI

今日は「場所の力：芸術・場所・スケール」というテーマでお話をいたします。私自身、土地、建築、場所についていろいろ考えてきました。文化も、ある場所の上に蓄積していくものではないか。とするならば、そのためにどのような場所を作っていくのかということが、結局、そこでどのような文化が生まれてくるのかということにつながるのではないかと思います。

今日、このサントリーホールを借り切って、こういう授業をすることは、とてもおしゃれで素晴らしいと思います。

私の個人的な思い出が、このあたりには実はあります。ある時期に、その頃教えていた学生さんと一緒に、東京のいろいろな場所を見て歩くという演習をやっていたことがあります。当時このアークヒルズの場所は、まだ再開発されていなくて、昔からの谷町と言う、ちょっとくぼ地になった古い住宅が密集して残っているような場所でした。

そこに霊南坂教会という教会がありました。今でも建て替えられて建っております。その当時の霊南坂教会は、レンガ造のなかなか風情のある建物でした。学生さんたちとそこの前あたりを歩いて行くと、そこからぞろぞろと人が出てきて、学生たちが「あれは誰だ、あっちは誰だ」などと言っていて、有名人が何人も出てきました。あとから気が付いたのですけれども、ちょうどその時間に山口百恵の結婚式を霊南坂教会でやっていて、その式が終わって、列席した芸能人たちがみんな出てきたところに我々がめぐり合わせたのでした。

ですから、私にとっては、アークヒルズというと、霊南坂教会、山口百恵というようにつながってきます（笑）。今はもっと幅広い文化の場所となっていますけれども。そのように、場所の記憶や性格は、時間のなかで作られていくものであるし、作りつづけられるものなのです。

この講演会の会場はアークヒルズにあるサントリーホールの小ホールで、ここにはコンサートのための大ホールもあります。劇、音楽といったパフォーミングアートは、このようなしっかりしたきれいなきちんとした場所が用意されて、そこで行われるというように考えられがちです。無論素晴らしいホールがあるに越したことはないけれども、歴史的に考えると、決してそれだけが芸術

を成立させる条件ではないのではないかという気がしてきます。

これはアテネのアクロポリスというところですよ。これがパルテノン神殿で、アテネの町です。アクロポリスは、アテネの聖域で岩山です。そこに神殿が建ち並んでいて、今でも大変素晴らしい場所だと言われています。

その下のほうに、このようなオデイオンと呼ばれるギリシャの劇場が残されています。これは、まったくの野外劇場で、後ろに背景になる建物、シーンがあつて、そこで演劇が繰り広げられ、人々はそれを取り囲んで観ています。屋外ですから、昼間は明るいけれども、夜は暗いという条件です。雨が降れば、濡れてしまうという条件です。そうした中で演劇が行われていました(図1)。

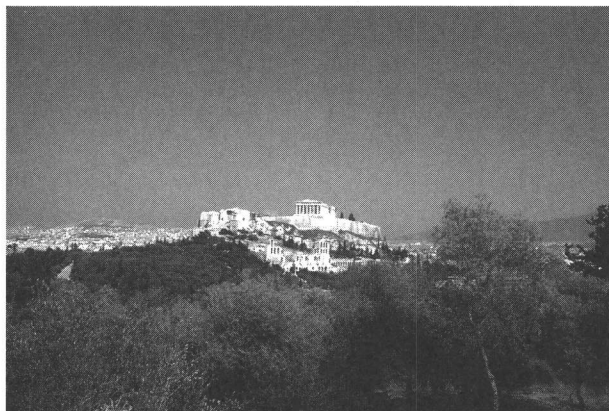


図1 アクロポリス (アテネ)

それは不自由だったかもしれませんが、このようなギリシャの屋外の場が、ギリシャ悲劇、あるいはギリシャ喜劇という演劇を生み出していく。場所との交流の中から生まれてくるもの、そういうものの大切さは、今の時代でも恐らく生きているのではないかと。もちろんギリシャのような野外劇場を今、作るということではなくて、今の街角の中から生まれてくる何か、街角と呼応する何かというものを見つける力が、皆さんには要求されるのかもしれないという気がします。

ローマにはコロセウム(図2)という大きな遺跡が残っています。これも、

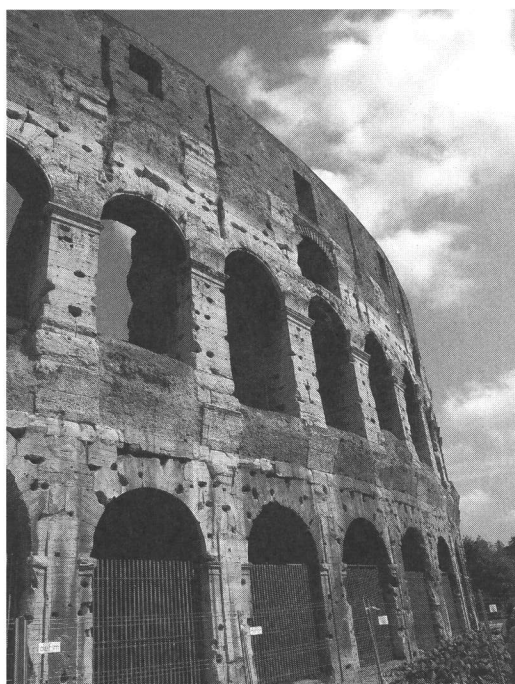


図2 コロセウム（ローマ）

この中は円形競技場で、いろいろな催しが行われた場所です。コロセウムというと、猛獣と人間の一騎打ちのような残酷な見世物があったというような印象が強いところですが、実際には、ここのほとんどの出し物は、象の行進とか、結構、お子さまも楽しめるペイジェントのようなものが多かったと言われています。

今だと、演劇などはだんだん夜中になると、過激なプログラムが増えてきますけれども、古代ローマでは、午前中が残酷なものなどで、午後は家族向きというものが多かったようです。どうしてかというと、午前中は、みんなは働いているのですが、ふらふらしている人たちがいると社会不安になる。そういう人なるべくこういうところへ集めて、刺激の強い出し物で、紛らわさせる。そして午後は、午前中に仕事をしたような人たちが、楽しみに集まるような出

し物にするというプログラムだったと言われています。

ということは、芸術は社会を安定させる力とも言えるし、社会をごまかす力とも言えます。そういういろいろな役割を持つ可能性があるわけです。ですから、皆さん方が、芸術に関係して、それを自ら作ったり、プロデュースしたりというようなことをやっていくときに、芸術はいろいろな側面の力を持っているということを、常に念頭に置いておく必要があると思います。

パリのオペラ座(図3)は、19世紀の大建築です。この建物は、パリの街を大改造していくなかでその一環として造られたものです。その意味で、都市改造が芸術の殿堂を生み出したと言われています。最初から、この場所は、パリの街の焦点になるように考えられていたので、いろいろな道がオペラ座を目指して放射状に集まってくるように計画されています。



図3 オペラ座 (パリ)

ですから、これを設計したシャルル・ガルニエという建築家は「史上最悪の敷地だ」と言いました。周り中から道が来ているので、裏がないわけです。目立つけれども、大変建物を建てにくい敷地だったわけです。それを彼は苦労しながらも、見事に造り上げたものです。

正面に入口があって、そして後ろのほうが楽屋や舞台です。オペラ劇場は、楽屋のほうが非常に大きいわけです。特に19世紀のオペラは、何種類もの舞

台装置を次々に繰り出していきますから、何セットも舞台が組めるなければなりませんし、それが上に吊り上げられていたり、あるいは吊り下げられている。そういう部分を後ろに背負って、オペラ座ができています。

入口にも、数多くの彫刻が添えられています。あらゆる造形的な装飾が、オペラという総合芸術のために結集されています。いろいろな芸術が互いに連動している、そういう時代がこの19世紀という時代だったように思われます。

オペラ座の内部のホワイエ（図4）と言われるところには大階段があって、そこをオペラ観賞に来た人が通っていきます。ここが一つの社交の場所にもなります。しゃなりしゃなりとここを歩くことで、みんなに自分をピーアールする。オペラ座の中には、舞台がありますけれども、このホワイエ自体も一つの舞台になっています。そういうような場所であるわけです。



図4 オペラ座ホワイエ（パリ）

このサントリーホールも、入口の部分がやはり大変華やかな舞台になっていることが分かるだろうと思います。それまでは、ホールは、真面目にコンサートなり、オペラなりを観に来て帰るところでしたけれども、サントリーホールの場合には、ホワイエのところで何か飲み物を飲んだりして、くつろげるようなコーナーを作っていることが有名です。サントリーがやっているので、当たり前ですけども（笑）。飲み物を売らないと商売にならない。その辺は、

文化と企業の結び付きがあります。

わたくしには非常におもしろい経験があるのですが、パリのオペラ座の周辺にはいくつかの銀行があって、そうした銀行のひとつを見に行ったことがあります。銀行には貸金庫室というものがあります。日本の銀行にも、大きな銀行には大きな貸金庫室が、小さな銀行にも小さな貸金庫室がありますけれども、オペラ座のそばの貸金庫室は、ものすごくゆったりしていて、机があったり、ちょっとしたコーナーがとってありました。「これは、何故なのですか」と聞いたら、だいたいお金持ちはみんな宝石類をこうした貸金庫に預けてあるのだそうです。オペラ座に来て、オペラを観るときには、その貸金庫室に行き、宝石を出し、その控え室のようなコーナーで着けて、そしてしゃなりしゃなりと出て行く。そしてオペラが終わると、また銀行の貸金庫室に行って、大事な宝石はみんな戻して帰っていく。ですから、そのような形で、銀行の貸金庫室は作られているということを聞いたことがあります。

ですから、オペラ座は文化ですが、銀行そのものも、オペラ座の文化との関係で、いろいろな道具立てをそろえていると感じて、非常におもしろく思いました。

オペラ座の中は、幕が上がると舞台が見えます。そのための額縁のようなホルの枠が付いているものを、プロセニウムアーチと言います。そのような形式の劇場の典型がオペラ座です。ただ、演劇の場合は、最初に見たギリシャの屋外劇場、野外劇場というものは、本当にステージを半円形に取り囲むような形で、出来合いのものがそのまま見えているというものでしたし、こういう幕と枠で舞台を仕切ることが決して一つの、それだけのやり方というものではありません。

サントリーホールもそうですけれども、音楽・コンサート会場ですと、ステージを方々から取り囲めるような形に、客席が組み立てられるという作り方もしばしば行われます。

ベルリンフィルのコンサートホールが、そういう形式のものとして、非常に有名な例ですが、サントリーホールもあちらの段、こちらの段という形

で客席が組み合わされています。ちょうどそれが葡萄畑のような感じだということで、葡萄畑というように呼んだりしています。皆さんが葡萄ですけれども、そういう形で全体を取り囲むという形式も非常に多いのです。サントリーホールは、ベルリンフィルのホールの形式を最大限取り入れて設計されたもので、ベルリンフィルの指揮者であったヘルベルト・フォン・カラヤンの助言を得たというものです。

幕がない劇場としては、日本の能舞台（図5）が非常に有名です。西本願寺にある北能楽堂は、日本の能舞台の中では一番古いものです。能舞台の形というのは、基本的に正方形です。柱が立つことによって構成されるこの正方形の大きさが、3間×3間という基本的スケールになっています。1間、2間という寸法を皆さんは分からないかもしれませんが、畳の長いほうの長さが、だいたい1間とされています。1間というのは、6尺です。1820ミリです。1メートル82センチぐらいです。これが1間の長さです。それが三つで3間。だいたい5.4メートルぐらいになります。それによって構成される正方形が、能舞台の大きさの基本とされています。

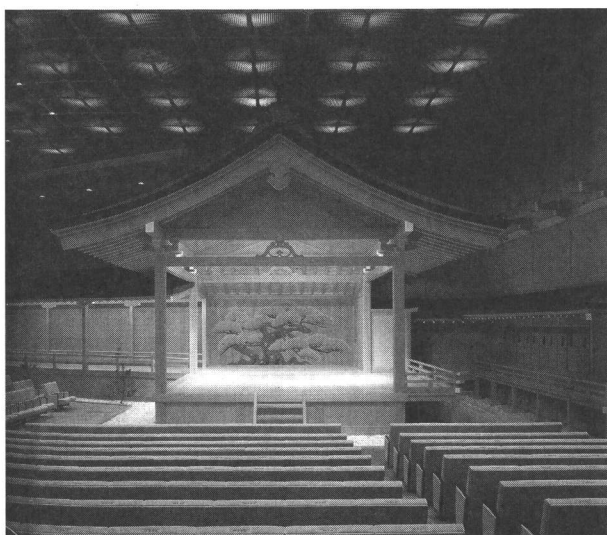


図5—1 能舞台 1

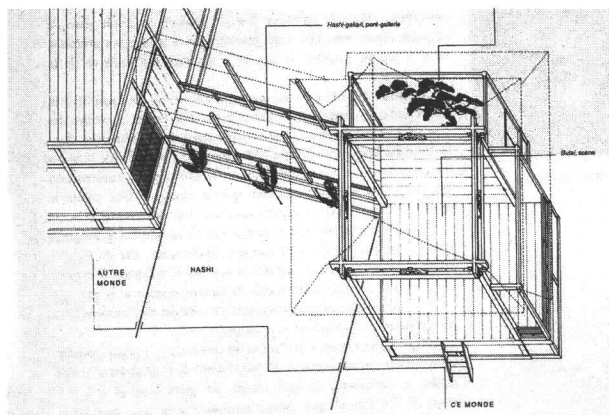


図5—2 能舞台2

日本の広さの把握の仕方は、いろいろなものがあります。1間×1間の畳2畳分のことを、今では一坪と読んでいます。建物や土地の面積の何坪というのは、1間×1間が一坪で、それがどれほど集積しているかで算定するわけです。しかしながら1間×1間の広さを一間（ひとま）と呼んだ時代が昔ありました。3間×3間だと、3×3は9ですから、九間（ここのま）というように読んでいました。九間というのが3間×3間の大きさですけれども、これはどうも日本人が、人が何かをするときには、非常にいい大きさだと考えたようです。

畳の大きさでいうと、18畳ということですから。現代の普通のお座敷などはもう少し小さい8畳ぐらい、つまり3.6メートル×3.6メートルですけれども、そういう普通のお座敷よりは広い5.4メートル×5.4メートルぐらいです。これが、何かを踊ったり、集まったり、パーティをするにもいいスケールということが、日本の中では言われていました。

ですから、この能舞台の大きさは、九間のスケールになっています。これがおもしろいところではないかと思います。

何か芸術を作っていくということには、場所がいりますが、その場所は、プロセニウムアーチで枠取りして、カーテンで仕切るという客席と舞台の作り方もあるし、何もない空間で作ることもある。ただ、その場のスケールが大きす

ぎても間が持たないし、小さすぎても窮屈だというようなスケール感というも
 のも、何かをやるときには大事なのではないかと思います。日本人は、そう
 いう場合に3間×3間の九間を、結構大事に考えたようです。

これは室町時代の東山殿会所（図6）という建物です。室町時代の御所などでは、中心になるところに、やはり3間×3間の広さをもつ部屋を設けています。そして、そこが人々が宴会をしたりするパーティ空間になっています。これをその時期には、会所と呼んでいます。会所というのは、文字通り会うところで、人が集まる場所とそのスケールが歴史的に確立されていたと考えられます。そうした機能を持つ建物全体を会所と言っていましたし、その中心になる部屋もまた会所で、その中心になる部屋としての会所の大きさが3間×3間です。

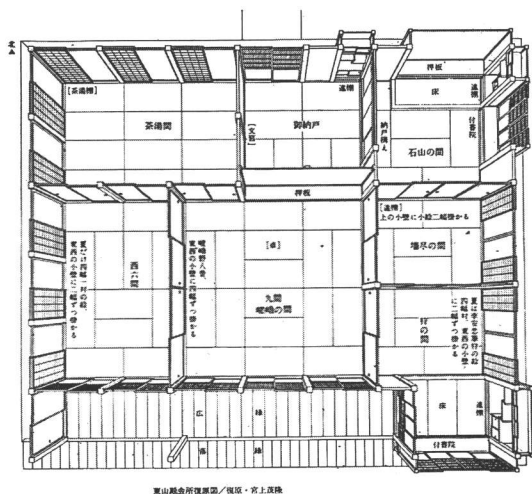


図6 東山殿会所

実は、これは室町時代の足利幕府の御所（図7）の想像図です。ここに東を
求めるお堂と書いて、東求堂というお堂がありますが、この建物だけは今、残っ
ていて、京都で銀閣寺に行くと、銀閣の横に東求堂という建物が建っているの
を見ることができます。元々は、あの辺には御所があって、そこに3間×3間の

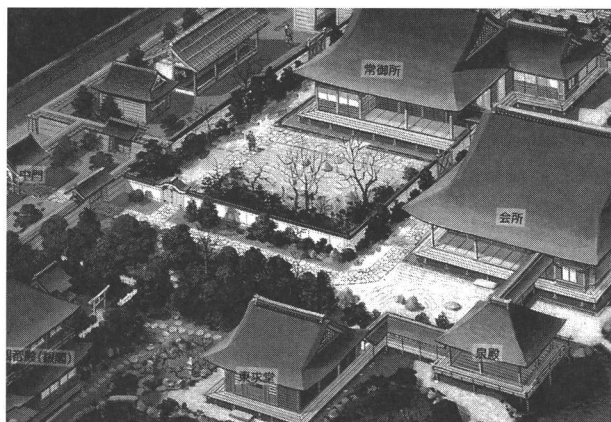


図7 足利幕府御所

部屋があったわけです。

四国の金比羅宮という海の安全を守ってくれるところは、非常に信心する人々が多いところ。ここには、金丸座という近世の歌舞伎の劇場があることで知られていますけれども、上のほうの書院の庭に、木が4本植えてあります。これは蹴鞠をする場所だと言われています。

蹴鞠は、平安時代の貴族が足で皮の球を蹴る遊びですが、無制限にやっても仕方ないので、ある範囲の広さの場所の中で蹴るのだそうです。それがやはり3間×3間のフィールドであったそうです。その目印に、3間ごとに木を植えてあります。このようなちゃんとした蹴鞠の場が残っているのは、今では金比羅宮ぐらいです。昔は京都にも他にいろいろあったようですが、金比羅宮に行くとそれが現在でも見られます。

ただ、ここは3間×3間ですけれども、外側にさらに余裕を取って、ここまでがフィールドになっています。本来、蹴るのは、このあいだでやりなさいというものだったようです。ここにも単なる原っぱが蹴鞠の場になります。そこには、ある種のスケールが設定されているということが、分かると思います。

調べてみましたら、ボクシングのリングも正方形で、ぴったり3間ではないのですけれども、だいたい5.4メートル前後のスケールだということが分かり

ました。何かルールによって少し、ボクシングのリングはサイズが変わったりもするらしいですけれども。あれも考えてみると、運動場のように広がったら、一方が逃げ出したら試合中、追い掛け回していなければならないし、あまり狭いと試合にならない。やはりボクシングのリングは、逃げがあるけれども、逃げ切れない、どこかでやらなければいけない。そういうスケールというものは、だいたいこのぐらいなのかなという感じがします。

劇的なパフォーマンスを行うためのセッティングは、劇場以外でも、たとえばお寺などでもそういうことが起きます。姫路に書写山円教寺という天台宗のお寺があります。そのお寺の本堂は堂々たる建物です。その横に接する側に食堂（じきどう）というお坊さんたちの食堂の建物があります。そしてこの本堂に向かって、唐破風という、特徴のある屋根のついた建物（図8）が建っています。



図8 書写山円教寺（兵庫）

この建物は、本堂に奉納するいろいろな踊りやお能などを行うための舞台として作られているものです。本堂の正面の反対側にあるこの建物は、常行堂（じょうぎょうどう）というお堂なのです。常行堂とは、お堂の中で常行三昧というまったく別の修行をやるためのお堂なのですけれども、本堂に向かった

ところにわざわざこういう張り出しを作って、ある場合にはちゃんと舞台になるように作った建物が設けられているのです。

実際にも、ここでは先ほどのところを利用して、お能を演じています。平成18年にも、常行堂のステージになっているところで能が行われました。この吹き放しになった部分は常行堂の一部であるのですが、本堂に対する舞台ともなるのです。平成18年の能楽の公演のときには、本堂の前が観客席になりました。しかしながらこの舞台で舞っている人たちは、あくまでも先ほどの本堂の仏様に向かって踊りを奉納しています。そのような使い方があります。

ですから、芸術のための場というものは、あらゆるところがそういう芸術の場に変わっていき得るということです。場所というものは、じつは固定したものではなくて、あるときにはその性格を変えていく。そうした場所の性格を見つけていく、あるいは、潜在的に存在している場所の性格を発見していくことが、アートやパフォーマンスに関係するおもしろさであり、能力なのではないでしょうか。

つぎに考えるのは西暦2000年を記念してローマに建てられたミレニウム協会(図9)と呼ばれる建物です。教会は人が集まる祈りの場ですけれども、人

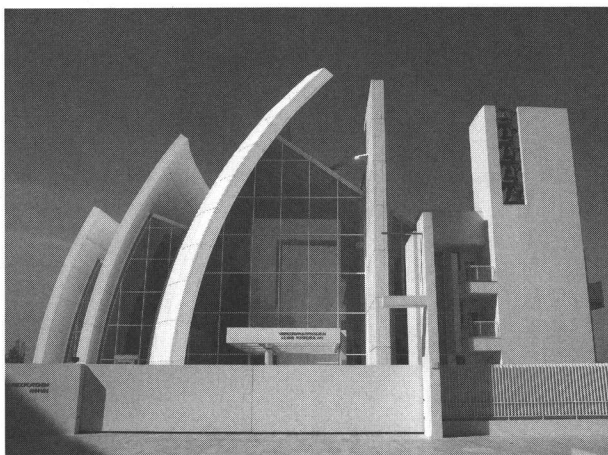


図9 ミレニウム教会(ローマ)

が集まって何かをするという意味では、極めて演劇的な性格を持った場所とも言えるものです。この建物の場合には、ノアの箱舟をイメージしたと言われていますけれども、船のような湾曲した壁を組み合わせています。その奥に祭壇があります。祭壇も船の形のようなイメージを作っています。

この建物は、ここで司祭がミサをあげ、信者がここに座するというものです。これ自体が、ある種、演劇的空間という性格を示しているように思います。

あらゆる場所は、一つだけの性格のものではない。その場所に別の性格を見つけることも、とても大事なのではないか。芸術は、そうした場所の性格の発見と関わっているように思います。

つぎに見ておきたいのは、つい最近、歩いていてたまたま見つけた神戸カソリック教会（図10）です。この教会も新しいタイプの教会で、非常に明るい祭壇があります。劇場のような雰囲気のある種を持った聖堂だという印象を受けました。

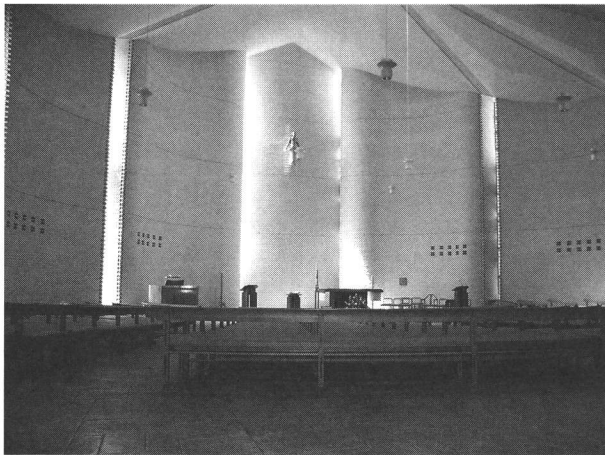


図10 神戸カソリック教会（神戸）

つまり人が集まるということ自体、その集まりから何か起きてくることであります。ですからひとが集まる場所は、常に集まりとともに生成変化する性格を持っているのです。場所は動かないものですが、そこでさまざまなものが

生成し、文化も生まれてくるのだと考えられるでしょう。

（本稿は、2008年4月3日、サントリーホールでの「青山学院大学総合文化政策学部新入生歓迎レクチャー・コンサート」において行った講演の記録である。）